

## 飛躍する北海道農業

第1回

グリーン・ツーリズムによる  
農業の活性化酪農学園大学農業経済学科  
准教授 相原 晴伴

## 関連施設数の増加

近年、グリーン・ツーリズムが広がりを見せている。その内容はさまざまであり、農作業の体験、地域の食文化を反映した食事をするなど、農家民宿やペンションでの宿泊などがある。また、家族や友人で旅行するプライベートなもののほか、中学や高校の修学旅行のような行事として行われることもある。グリーン・ツーリズムは、食育や地産地消とも関連が強く、地域農業の活性化の方策としても注目される。

北海道でも、二〇〇二年十二月に「北海道グリーン・ツーリズム推進指針」が策定され、〇四年三月には、その「推進計画」が出されるなど、力が入れられている。グリーン・ツーリズムの関連施設数も増加し、二〇〇八年には二千八十四施設となった。もともと多いのは「直売所」の千八十一施設であるが、「ファームイン」や「農業体験」の施設数も急増している。

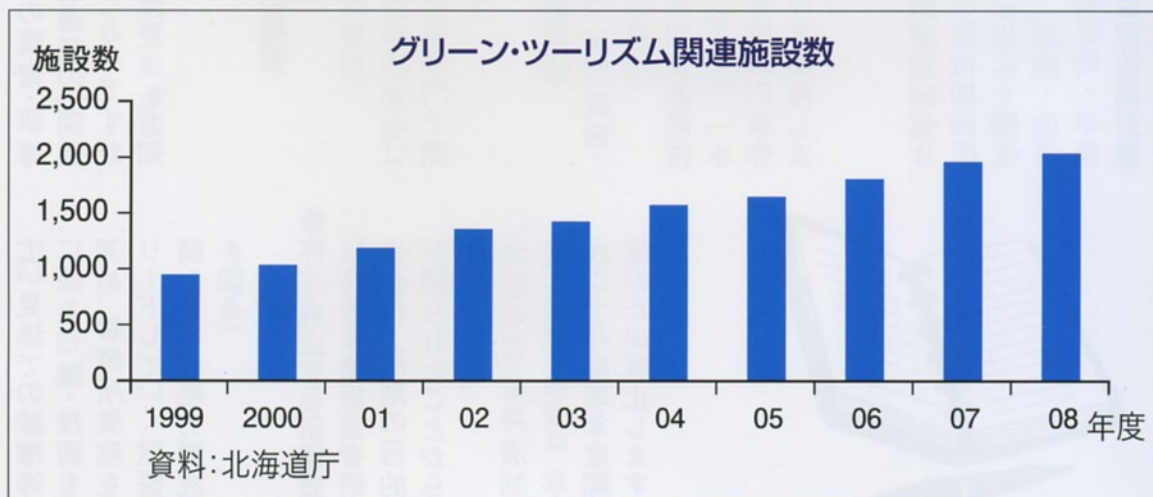
政府は「共生・対流」という用語で、都市と農村との交流を推進し

ており、今後、ますます広がることが予想される。本稿では、グリーン・ツーリズムの中でも、農村宿泊や農業体験が盛んな、長沼町と美瑛町の状況を紹介し、今後の展開方向を考えてみたい。

長沼町における  
修学旅行生の受入れ

長沼町では、修学旅行生の受け入れに重点を置いた事業を行っている。同町は、二〇〇四年三月にグリーン・ツーリズム特区の認定を受けた。〇五年度から道外の修学旅行生の受け入れを開始し、〇八年度の受入れは、高校が十四校、中学校が十校、小学校が二校となっている。修学旅行生の受け入れ人数の増加に伴って旅館業取得農家も増え、〇八年度には百五十九戸となった。また、札幌市を中心とした中学校の農業体験の受け入れも行っている。

運営は「長沼町グリーン・ツーリズム運営協議会」が行っており、役場の産業振興課が事務局を担当して





いる。この協議会では、受け入れ人数に応じて、どの地区の農家に受け入れてもらうかなどを調整している。

修学旅行生を受け入れた農家は、生徒を家族の一員との気持ちで迎え入れ、農業体験はもちろん、宿泊や食事の準備などもいっしょに行う。農業体験の内容は、各農家に任されているが、中学生の受け入れが多い五月には田植え体験、高校生の受け入れが多い九月十月には、さまざまな農産物の収穫・調製の体験が中心となっている。

問題点として、受け入れ農家の負担が大きくなりがちなことが挙げられる。農家では、修学旅行生に充実した体験をしてもらえようように、農作業時期を調整することもあるという。また、受け入れ人数が多い時期は、春と秋の農作業が忙しいときにちょうど重なる。そのため、たとえば水稲作が忙しいときは、畑作や野菜作の農家に受け入れてもらうというような、全町的な調整も行われている。

## 美瑛町における宿屋の活動

美瑛町は、「丘のまち」として、丘陵地帯の美しい景観が特徴であり、全国から観光客が訪れる。同町での宿泊施設は五十軒ほどの家族経営のペンションが中心である。

それぞれのペンションでは、特徴のある接客を行っている。たとえば、あるペンションでは、スタッフが夕食後に旅行雑誌には出ていないような、その時期ごとの観光スポットを紹介したり、写真好きのオーナーが穴場を伝授している。また、冬場には、歩くスキーで観光客を景色が良い場所に案内するという企画もある。また、別なペンションでは、犬やヤギを飼っており、宿泊客と動物とが触れ合える環境を作っている。ペンションの多くは、提供する食事に地元農産物を積極的に取り入れているという。

ペンションでの宿泊は一般観光客が中心であるが、修学旅行生の受け入れも行っている。そのサポートを、役場の商工観光課の「美瑛町体験

旅行受入委員会」が行っている。修学旅行生には、農作業体験をしてもらっているが、ペンションの経営者が受け入れ農家を手配することになっている。その際、修学旅行生を受け入れているペンションで委員会を作り、受け入れ農家との調整を行っている。

問題点として、ペンションへの宿泊者数の、夏と冬のギャップが非常に大きいことが挙げられる。夏場はほぼ毎日、満室となるが、冬場の宿泊者は少ない。先に紹介したペンションのように、歩くスキーを取り入れて宿泊者の確保をしているところもあるが、満室になるほどの効果はない。

## 地域的・全道的な調整組織の充実を

今後、グリーン・ツーリズムの拡大に向けて、地域内、あるいは地域間でのネットワークづくりが重要となってくる。修学旅行生の受け入れにおいても、一部の農家にあまりにも負担が集中しないような調整が重

要である。また、宿屋と農家との連携がどれだけうまくいくかが、観光地では発展のポイントとなる。さらに、北海道のグリーン・ツーリズムの総合案内の機能の充実も求められる。

地域では、グリーン・ツーリズムにどのように方向性で取り組むのかの方針を、農家、宿屋、農協、行政などで統一することが必要となろう。修学旅行生の受け入れを中心とするか、農村の景観の観光に重点を置くかなどである。

グリーン・ツーリズムを通じた、食育、地産地消の取り組みが、北海道農業のファンを増やし、道産農産物の販路拡大に結びつくことが期待される。

### ●執筆者プロフィール

相原 晴伴氏

一九六六年福島県生まれ。北海道大学農学部農業経済学科卒業。同大学院農学研究科博士後期課程修了。博士（農学）。酪農学園大学講師を経て、二〇〇四年四月より現職。  
趣味は高校時代より続けている男声合唱。  
好きな言葉は「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」（ローマの信徒への手紙第五章三、四節）